

あの作品の制作は、こうして始まった 作家に依頼してみよう！

文芸編集者はどのように作家とのコミュニケーションを重ね、作品執筆依頼をしているのだろうか。まずは、依頼のおおまかな流れを知っておこう。その一例を、新潮社の新井久幸さんに聞いた。



新潮社 新井さんのやり方

作家の連絡先を手に入れる

気になる作品を見つけたら、その作品の担当編集者を通じて、電話番号など、作家の連絡先を教えてください。

新井さんは作家への最初の連絡では電話することが多い。ウェブサイトを持つ作家も多いので、そこから直接メールで連絡する場合もある。

作家に電話する

「作品が面白かったので、ぜひ一度お会いしたい」という思いを簡潔に伝え、会ってもらえるよう、アポイントをとる。

会う前には、必ず複数の作品を読んでも、できれば、すべての著作を読んでもかまいません。作品数があまりに多い場合は、時間的に可能な限り読む。

会ったときに話すポイント

作品についての感想を述べ、一緒に仕事をしたい旨を伝える。また現在の仕事の状況、スケジュールが空くのはいつごろか、を聞く。

どのようにコンタクトを取ればよいかを確認しておく。電話が苦手であったり、メールなどはかの手段で連絡を望む作家もいるからだ。

作家の手が空くまでの期間

プレッシャーになったり、仕事の邪魔にならないように、連絡を入れる。

一度会ったくらいでは、単なる雑談のメールなどはしにくいので、新刊が出たタイミングなど、仕事に関連した話題があるときに連絡することが多い。

いよいよ作品づくりが始まる

作家それぞれのやり方にあわせて、細かい進行方法をためておく。

- 原稿の受け取り方
- グラフの送付手段
- 文字数、など……

例えば、文字数。新井さんは基本的に「物語が要請する長さ」で書いてもらう。なので、字詰め行詰めは脱稿後、全体のページ数など最終的な造本イメージを作りながら調整していく。当然、事前に文字組を決めてほしいというリクエストがあれば、相談して決める。

新井 久幸さん 新潮社 出版部 文芸第二編集部

あらいひさゆき / 1969年東京生まれ。京都大学法学部卒。1993年新潮社に入社し、「新潮45」編集部を経て1998年出版部に異動。以来「黄泉がえり」(梶尾真治)「サクリファイブ」(近藤史恵)「ゴールドスタンパー」(伊坂幸太郎)などを担当。



「Story Seller (ストーリー・セラー)」
新潮社 780円 (税込)

伊坂幸太郎、近藤史恵、有川浩、佐藤友哉、本多孝好、道尾秀介、米澤穂信ら、5年後10年後の小説界を牽引しているであろう若手作家7人の書き下ろしを収録。一切の無駄が無く、「物語のためだけに作った雑誌」という印象だ。2009年春に第2号を刊行すべく、読者企業中とのこと。

その時、作家が動いた 手紙のチカラ

面白いと思った作品に出会ったら、版元の担当編集者に連絡して、その作家の連絡先を聞く。すぐに教えてもらえないこともあるが、出版社経由で連絡が取れることもあるし、少なくとも問い合わせがあったことは伝えてもらえる。新人賞を設けている出版社にとっては、受賞作家が注目されるのは、むしろ喜ばしいことなのだ。

初めての依頼でも、新井さんは多くの場合、最初は電話で連絡して、いきなり長々話したのは失礼なので、簡潔に、読んだ作品の感想や、一度会って話したい旨を伝える。「一度お目にかかりたいと言えば、

気になる作家の連絡先を担当から聞き、まず電話

2008年本屋大賞1位を受賞した伊坂幸太郎さんや、同賞2位の近藤史恵さん、また「図書館戦争」シリーズが人気の有川浩さんなど、若手作家7人を擁して発刊された「ストーリー・セラー」。この雑誌を一人で編集した、現在編集歴15年の新潮社の新井久幸さんに、作家への依頼から、制作開始まで、自身のやり方を聞いた。

暗黙の了解のようなもので、仕事の話だろうということも伝わりやすい。雑誌のために時間をとってくれるわけありませんからね。

会う前には最低でも何冊かは著作を読んでおく。理想としてはすべての作品を読んでおきたいところ。気になった作品からどんどん読んでいく。

作家に会えたら、まず詳しく作品についての感想を話す。どのようなところを面白いと思ったのか、あるいは、疑問に思った点があれば聞いてみる。ただし、「よほど求められない限り、「批評」

的な話はしません。初対面でそんなことを言うのは失礼だし、そういう話がしたくて会うわけではないですから。

そして、いつごろスケジュールが空くかを聞く。とはいえ、作家の仕事のスケジュールは、比較的動きやすい。今のところ半年間を見込んでいる仕事でも、終了時機が前後することはままあるため、大体の目安にとどめる。

新井さんは、具体的にどのような作品を書いてほしいか、などは、あまり言わないという。それは、「その作家が一番書きたいことを、一番

制作進行は「オーダーメイド」作家それぞれのベストを探す

「やりづらいことがあったら何でも言って下さい」といよいよ制作に入る段階で、新井さんがまず作家に伝える大事なポイントだ。作家という肩書きは「一緒でも、仕事の進め方は千差万別。型にはまった進行をするのではなく、ケース・バイ・ケースで作家に合わせていく。

「本は作家が執筆したものです、編集者にも、「自分の本」という認識があるんです。だから、作品を大切に思う気持ちと共有して、一緒に仕事をしたい。そうやって出来た本を世の中に送り出すときには、自然と「がんばってこいよ！」「うちの子をよろしく！」という思いになるんですよ。

「大きな箱」と「小さな箱」

ある人が行った依頼方法だ。お土産として、「大きな箱」と「小さな箱」の2つを作家のもとに持っていった。「どちらかを選んでください」となれば、やはり思い浮かぶのは「舌切り雀」の「大きな葛籠」と「小さな葛籠」。作家もそこは承知で、「小さな箱」を選んだ。ところが、開けてみると中には、やはり小さな箱が。

それを開けても、同じような箱が入っている。ロシアのマトリョーシカのように、開けても開けても、箱、箱、箱。ようやく箱じゃないものが入っていたかと思えば、それは小さく折られた紙だった。開けてみると、「原稿の依頼」と書かれていたという。